

沖縄芝居の紹介

細井尚子（アジア地域研究所所員・異文化コミュニケーション学部教授）

細井：おはようございます。昨日に続けておいでくださった方々もいらっしゃり、ありがとうございます。今日はまず私が前座として沖縄芝居について簡単にご紹介し、そのあと瀬名波さんと伊良波さんにご登壇いただきまして、瀬名波孝子さんの芝居人生を語っていただき、実際に少し歌って頂くという段取りで進めて参ります。

沖縄の伝統文化

沖縄の伝統文化というのは琉球王国時代の無形文化で、これは、琉球王府の外交の具として形成され、洗練・発展しました。皆さまご存じのように、琉球王国は、中国と日本、両方と関係を持っておりましたので、中国の冊封使の応接では「御座楽」と「組踊り」、舞踊を、日本といいましても薩摩藩主に対してですけども、「御膳進上」の際に「唐躍」「御座学」、舞踊を演じておりました。「唐躍」は中国の芝居をできるだけ忠実にコピーしたもので、中国語で演じておりました。

興行の始まり・演じる場

日本では廃藩置県は1871年に行われたのですが、琉球王国に対しては72年にまず藩を置いて、79年に県を置くという形になりました。この1872年から79年間の諸策を琉球処分と呼びます。琉球処分により王府は解体し、王府に仕えていた士族が職を失います。「御冠船踊」を演じた者の一部は、没落士族に教授し、料亭などで秘かに演じて、糊口をしのいでいました。沖縄では、まだ興行も何も成立していない1872年の時点で「遊劇興行取締令」が出されています。これは本土と足並みを揃えて出されたものですが、沖縄では取締令の枠内で興行が生まれ、育つという特殊な形をとることになりました。

1883年までには、カマジー（藁袋）で空間を仕切り、組踊を見せるカマジー芝居が登場します。「唐躍」は琉球王府とともに消滅しました。このカマジー芝居が、王府の芸能を初めて庶民に公開し、それからわずかですが木戸銭を取っていますので、興行の始まりということになります。1890年代入ってからは、そういう空間を仕切った臨時のものではなくて、きちんとした常設劇場が出来てきます。最初の瓦葺きのしっかりとした劇場というのが、この仲毛演芸場で、91年に設立されました。

民間化・沖縄芝居の形成

琉球処分以前は王府の外交の具だったので、大衆のものではなかったわけですが、大衆を相手に見せていくことで少しずつ大衆化していきます。舞踊に関しては、御冠船踊を演じた者から直接習った、第一世代が改革をしていきます。庶民生活を題材にしたものや、群舞を創出しまして、それらは雑踊と総称されています。

組踊に関しては、さらに下の世代、第二世代の演者が大衆化に貢献します。民間化には2つの方向性があったようです。1つはまず、組踊の要素を生かしたもの、組踊は台詞と歌、それから舞踊的動作で構成されておられますので、この構成要素を維持して、主題を忠義や孝から父母と子供、あるいは家族、恋人間の愛情といったものに移す。この先に歌劇が生まれてきます。

もうひとつは組踊が持っていなかった要素である口語を用いるとか写実的動作、演技などを用いる方向で、この流れから方言台詞劇が生まれてきます。こうした組踊にない要素は、本土から沖縄に上演に来たもの、壮士芝居、新派、歌舞伎、軽業など多様なものが来

ていますし、沖縄の演者が、本土や台湾で見たもの、それを直接写すという形で取り入れました。

方言台詞劇

このような2つの方向があるならば、組踊の要素を生かしたほうが早くできそうな気がします。実際は方言台詞劇が先に誕生します。本土から最初に来たとされるのは1896年の壮士芝居ですが、当時の反応を新聞や演者の回想録等から見ますと、血のりを使う等写実的な演技・演出、演目を短期間で取り替えていくことなどに驚いたようです。

98年頃から徐々に方言台詞劇が盛んになると、上演する番組の中で、組踊や舞踊が減っていきます。1903年に好劇会という芝居のレベルと演者のレベル向上を目指した組織を演者自身が作り、本土や台湾に交代で行って芝居を移植します。この組織は非常に重要で、特にこの上間正品は本土で言えば、新劇を作りだそうとした人々と同じような働きをしました。本土でやっていたものをそのまま、沖縄の大衆のためにかみ砕くことなく、そのまま入れてくるわけですね。上間正品を中心とする沖縄座と、渡嘉敷兄弟が中心となる球陽座が競い合って1906年から9年間は、歴史に取材した琉球史劇と呼ばれるものなどが大流行します。この時期は方言台詞劇の時代と言える状況になりました。

歌劇

歌劇の方はといいますと、対照的な2人がペアになって踊る打組踊に付いている歌が、従来は演奏者が歌っていたのですが、1900年頃から演者自身が歌いながら踊るようになり、一場の滑稽劇のようなものが生まれてきます。方言台詞劇の大流行の影響もありまして、だんだん長尺化、悲劇化しまして、1910年に初めて悲劇的な内容で、女性を主人公にした作品が生まれます。これが歌劇です。

私たちは琉球歌劇と言いますが、沖縄ではただ歌劇と言います。歌劇と言った場合、悲劇的な内容で女性が主人公であるという二つの要素は外せないようです。三座鼎立期に、さまざまな歌劇を上演し合い、競い合っています。興行で食べている一座同士が競い合うわけですから、様々なものをやりますが、やはり悲劇的な内容で女性主人公であるという2点を外したものは、あまり人気を得られませんでした。三大歌劇と言われ、今でも繰り返し上演される作品は、この2つの要素をしっかりとっています。後ほど、瀬名波さんと伊良波さんが実演して下さる『泊阿嘉』と『伊江島ハンドー小』はこの三大歌劇の内の2作で、三大歌劇はこれに伊良波さんのおじいさまである伊良波尹吉さん作の『奥山の牡丹』を加えます。更に『薬師堂』を加えて四大歌劇とすることもあります。

沖縄芝居に対する圧力

次に沖縄芝居に対する圧力を押さえておきたいと思います。沖縄芝居に対する圧力で重要なのは、まず、沖縄の状況を考えずに、本土の演劇規制をそのまま入れているということが1つです。沖縄では興行が成立する前から規制があったという特殊性はお話ししました。1882年の取り締まり令以降、1886、91、92、1929年と、続けて出されています。しかしこうした規制・規則よりも、影響が大きかったのは新聞紙上で展開されたネガティブ・キャンペーンではないかと思っています。これはかなりしつこく続きました。特に女性の支持を集めていた歌劇が攻撃されています。沖縄芝居の圧力の2つめは、この歌劇を標的にしたネガティブ・キャンペーンです。芝居のレベルが低いとか、あるいは演者の女性問題とか、事実かどうかはともかく、伝統的な観念からみると社会的にマイナスと思う要素を非常に強調して攻撃していく。地域によっては女性の観劇を禁止するなどということもありました。

しかしながら、ネガティブ・キャンペーンが断続的に展開したり、規制や禁令が続けて

出されたりするというのは、本土や中国などでもそうですが禁令が出ても続いていた、あるいは勢力が衰えなかったという証拠になります。従って、沖繩芝居はずっと大衆の支持を得ていたことが分かります。

1930年代後半から、日本語普及運動が新しい段階に入ります。これは台湾もそうですが、日本語普及運動は、最初は学校の中でだけ展開しますが、やがて学校から地域に広がっていきます。最初は子供を育てるお母さんたちを対象に、地域の婦人たちを集めてやったりしています。1930代後半、37年くらいからですが、皇民化運動とこの日本語標準語励行運動が一体化しまして、方言撲滅運動と言われるほど徹底化していきます。皇民化運動は言葉だけでなく、例えば、沖繩でやられたもので言えば、沖繩の独特な姓を日本風に改姓する。沖繩の墓地である亀甲墓を新規のものは作らせないとか、人々の生活の重要な要素をどんどん本土化させていきます。

昨日南洋への沖繩移民についてシンポジウムがありました。例えば、沖繩から本土に留学、あるいは労働で行った人々が差別を受ける背景には、日本語が流暢に話せないことも考えられた。そうしたこともあって、沖繩の人々自身もこの日本語標準語励行運動を積極的に推進するという方々が多かった。これはこれで沖繩の特徴の1つでもあると思いますが、台湾でも同じような傾向が見られました。

結局1942年に芝居もすべて日本語標準語で演じなければいけないということになりました。沖繩芝居は沖繩の言葉を使って、沖繩の音楽を使いますので存続危機に陥ります。言葉を奪われるというのは、それまでのさまざまな禁則やネガティブ・キャンペーンよりも、ずっと致命的だったのです。

沖繩芝居の復活

1945年に「アメリカ世」の時代になりまして、沖繩芝居は復活します。アメリカ軍政府は沖繩芝居の演者を集めて沖繩芸能連盟というのを組織させ、審査委員会を作って、試験を実施し、演者・音楽家50名に芸能審査証を交付しました。そして、松・竹・梅という3つの移動劇団を設立します。当初は50名に芸能審査証を交付しましたので、各団16名くらいでしたが、後に増加して1つの団が40名くらいになりました。この時代に復活した沖繩芝居はそれ以前と異なり、団員は公務員になります。公演の際に、おまへたちは公務員でお金をもらっているのに、木戸銭を取るのかと批判されたという話も残っています。巡業地域を区分して、この地域は松、この地域は竹、この地域は梅というふうに振り分けますが、沖繩の人々にとって、沖繩芝居は非常に密接なものだったので、露天の劇場などがどんどん作られ、1948年の時点で44カ所あったとされています。たった3つの劇団で回りますので、全く需要を満たせない。また、芸能審査証を持たない演者・音楽家もたくさんいらした。見る側からはもっと劇団を作ってくれ、やる側からは自分たちも認めてくれという声があり、結局管轄していた文化庁は解散して、劇団は自由開業になります。

沖繩芝居の衰退

自由開業後、沖繩芝居は非常に活発になりますが、その当時からみると、現在は公演回数・劇団とも激減しました。その原因の1つとして、1959年のテレビ、60年のラジオの放送が始まったことが挙げられます。放送開始当初、番組がないので録画や中継で舞台をそのまま番組にしてしまいます。劇場まで行かなくても見ることができる、あるいは聞くことができる。特に舞台の番組がある曜日は観客が来なかったと言います。2つ目は、そんな状態だったので、劇場の映画館への改装が進みます。ところが60年代に入ると、映画もテレビにどんどん押され始めます。1965年には沖映本館という映画館が回り舞台をもつ大きな劇場に変わり、残っていた沖繩芝居の一座のスターだけを集めて、スター公演をします。瀬名波さんもこのスター公演に参加されていました。

しかしその結果何が起きたか。結局、多数の一座がなくなりました、スターを失った一座が、舞台機構の整った沖映本館でやっているスター公演のようなことはできません。もともと少なかった観客は、全部沖映のほうに行ってしまいます。この沖映は沖繩芝居にとっては起死回生策であると同時に、沖繩芝居の地力を削ぐ副作用をもっていました。沖映本館の沖繩芝居も、自主興行は1977年で終わりました。

以上、沖繩芝居を巡る1970年代までの大体の流れを簡単にご紹介しました。